

王蒙「組織部来了個年輕人」に描かれた「官僚主義」について

近 藤 正 義

はじめに

王蒙「組織部来了個年輕人」⁽¹⁾は「組織部新来的青年人」の表題で「人民文学」1956年9月号に発表された⁽²⁾。それは、中華人民共和国が成立して7年が経過し、前年には中央宣伝部長陸定一が「百花齊放・百家争鳴」の方針を発表して各方面での活発な論争を推奨した直後であった。

この作品は国内に大きな論争を引き起こしたと言われている。林黙涵⁽³⁾によれば、読者の意見には賛否両論があり、評者の意見も様々であったが、論争の中心は、党機関に於ける官僚主義現象の批判という先鋭的テーマを取り上げたことへの是非であった。更にこのような官僚主義が北京に存在する筈がないとか、作者が党機関を意図的に中傷誹謗しているなど作者の創作意欲に冷や水を浴びせるような意見もあったと言われている。この作品に描かれた官僚主義について検討する。

1. 小説の概要

北京の某区委員会と通華麻袋工場が小説の舞台である。この区委員会組織部に小学校教師であった林震が着任して工場調査を担当することになった。

通華麻袋工場長王清泉は工場管理を担当者に任せて自身は執務時間中も将棋に熱中しており、工場は増産要請に対応できず、入党者拡大活動も実績が低迷気味であることが判明した。生産科長魏鶴鳴が改善案を取り纏めるために工員たちと検討会を開催した。これに対して王清泉は区委員会に苦情を申し立てた。区委員会は座談会活動を支援した林震を叱責し座談会を中止させた。悩んだ魏鶴鳴は、工員たちの意見を取り纏めて「北京日報」紙に投書したことから王清泉の問題が公になった。組織部副部長劉世吾は林震とともに工場を自ら調査し、一週間程で工場長解任案を取り纏め、区委員会で承認した。その会議で林震は再発防止も考慮するよう提案し

だが、劉世吾は取り纏めた案が工員たちから歓迎され区委員会にも感謝していることを紹介し、再発防止の検討をするには要員も時間もないと反論した。提案が採択されなかったことに林震は自分の経験不足と単独行動の弱点を痛感させられ、次なる取り組みに新たな闘志を燃やすのであった。

2. 登場人物の性格と特徴

小説に登場する人物について特徴を整理する。

①林震——規則通りに仕事をするのが党员としての責務であると確信する青年

1953年に師範学校を卒業して直ちに小学校教師となった。教師になっても学生時代の習慣そのままに 朝はバーベル練習、夜は日記、祭日には助言を求めて先輩を訪問する生活を続け、翌年に教育局奨励賞を受けた。中学生時代の作文「二十二歳になったら」に照らすと、教師生活には創造や冒険がなく、所謂「青年積極分子」に比べて成果が少なく不満を感じていた。二十二歳の若さで区委員会組織部に転出することになり、これから本当の生活が始まると意気込んで着任した。彼の理想像は、映画や小説の中の主人公であり、区委員会での多忙な幹部、書類の遣り取り、同時進行する幾つもの会議、精密な分析や討論を見て少し不安を感じた。劉世吾のもとで建党工作进行を担当し、通華麻袋工場の調査を始めた。林震は「共产党员は、国家、党、人民のために正しいことを徹底して行う責任がある」「年齢も経験も関係なく正しいことは正しい。不正は厳しく糾弾しなければならない」と固く信じている。

②王清泉——過去の栄光を捨て切れない官僚

抗日戦に勝利した後 国民党軍に派遣され部隊の内部工作をした経験を持つバリバリの情報部員で、国民党軍の副団長となり、共産党との連絡が途絶えた時期もあったが、解放後に復活した。国民党軍瓦解工作に行ったが、自身は国民党軍官僚の風習に染まっている。中央某部に所属していたが、男女関係の問題で処分を受けて通華麻袋工場へ副工場長として転勤し、工場長に昇格した。毎日腹いっぱい食べたのち事務室で書類整理と将棋に没頭している。毎月労働組合会議や党支部会議で講話するが、増産競争に負けたことで工員を叱り飛ばす。品質に関心なく、経済主義思想の持ち主である。

③劉世吾—— 温厚で目配りの好く行き届く実務派

北京大学在学中に自治会議長として街頭デモにも参加し、国民党軍の流れ弾で重

症を負った。組織部副部長として極めて多忙で、出席を求められる会議がとても多い。新たに公布された「拼音文字草案」を習得し、早速会議記録作成に適用する積極性がある。回覧文書は題名と結論を見ただけでサインする場合もあるが、三千字未満の指示文書にも午後の時間をかけて記号をびっしりと書き込んだりする。文学好きで「静かなドン」を一週間ほどで読了した。「貴族の家」「開かれた処女地」に感動もし、文学作品に描かれた世界に身を置くことを想像したりする。

④韓常新——自分が損をしないように立ち回る出世主義者

劉世吾の部下で、転入してきた林震の指導を担当。最近に結婚して副部長に昇進した。昇進とともに現場に出る機会は減り、報告を聞き、書類に手をいれ、人と面談するなど専ら執務室での仕事が多くなった。麻袋工場の党勢拡大実績を調査した際に、低調な実績を見て、「黨員拡大活動が出来ないような厳しい労働条件にも係らず士気を向上させ生産能率で好成績を収めた。」と内容を都合よく纏めて報告する要領のよさを持っている。

⑤趙惠文——夫や上司を冷静に観察する女性

組織部で林震の同僚。組織部に転属して三年、事務を担当。19才で結婚、夫は軍人出身で中央官庁にて科長に昇進した。子供が一人いる。軍事幹部学校を出てから在朝鮮文芸工作団に配属されてハスキーボイスの歌手をしていたこともある。家ではよくラジオでチャイコフスキーなどの音楽を聴いて仕事の悩みを紛らわせている。

3. 組織部内の個々人の行動の特徴

王清泉問題の処理に際して、組織部内には以下のような行動パターンが現われている。

①「問題点をすりかえ保身を図る」

魏鶴鳴が成績改善を図るために工員たちと座談会を開催すると、王清泉は、「座談会開催に工場長承認を受けていないことや参加者たちに思想的な問題がある。」と組織部長に直訴して中止させた。工場操業成績の向上は喫緊の課題であり王清泉に別途の方策があるのではなく、自らの体面維持のために理屈をつけて座談会を中止させたのである。組織部幹部もそのような行動を黙認した結果、問題の本質が何も解決されず、魏鶴鳴の士気を阻喪させるだけで、北京日報に掲載されるまで問題が放

置された。

②「自己の評価にマイナスとならないように行動する」

韓常信は党勢拡大実績を調査に出掛け、新規入党者が少ないことを知った。自己の成績評価がマイナスにならないように「党勢拡大に取り組めないほど生産活動に忙しくその中でも士気が高く生産が向上した。」とのロジックで上司に報告している。調査に同行した林震が後日その内容を読んで仰天したほどで、文章を飾って問題点を覆い隠す典型的な行動と考えられる。

③「幹部同志でお互いを庇い合う」

林震が麻袋工場を調査して、王清泉の執務態度不良や工場内に溜まっている不満を韓常信や劉世吾に報告すると、意外にも彼らにはその状況は既知のことであった。また劉世吾は、王清泉が国民党軍に派遣された立派な経歴もある情報部員であったからとして、その状況を容認するような意見を述べている。

④「互いに仕事の縄張りをきっちり守る」

林震が王清泉の執務態度不良を指摘すると、韓常信は、「その問題が林震の担当レベルを超えており、豊富な経験を有する者が取り組むべきテーマである。」と林震の介入を拒否し、林震担当の党勢拡大実績を早急に上部に報告するように指示した。

⑤「新しい取り組みを抑制する」

魏鶴鳴の企画した工場座談会を中止することに反対する林震は「党の利益に反する現象には断固戦う責任がある」と主張するが、劉世吾は新たな行動を制約するよう反論した。「第一に、魏科長が王工場長に個人的な偏見をもっていないか、第二は、参加する工員たちに複雑で邪悪な心をもっていないか、第三は、この会議が王工場長を吊るし上げ、天下大乱となる心配はないか・・・」

4. 世代間に見られる考え方の比較

王清泉の問題を扱う過程で、組織部の中には、世代間で考え方に特徴があることが読み取れる。以下この世代による考え方の特徴を検討する。

小説の中の人物を地位や来歴により分類すると、日本との戦争や国共内戦などを文字通り命を懸けて戦い抜いて新国家樹立に貢献して官僚組織の幹部になっている王清泉、劉世吾らの第一世代、新国家の官僚組織の中で競争を勝ち抜いて昇進した韓常新や趙慧文の夫らのような中堅幹部の第二世代、党章や規則などを与えられ、

その遵守が当然と教育されて官僚組織に入ってきた若い世代の林震、趙慧文ら第三世代に分類される。

林震らの新しい世代は、党章などに記述された方針に沿って問題提起を行い積極的に不正と闘うのは当然のことと認識していた。そこには党を絶対的に信頼し、「自分の利益よりも国家、人民の利益を優先するべきだ」との信念に基づいて行動する熱意が表れている。彼らなりの正義感であり、使命感である。林震が部内会議で述べている。「黨是人民的,階級的心臟,我們不能容忍心臟上有灰塵,就不能容忍黨的機關的缺點」⁽⁴⁾ (党は人民のもの、階級の心臓だ。心臓のうへの埃には我慢できないし、党機間の欠点は決して許せない)

これに対して韓常信ら中堅幹部らは、職位に伴う心地よい待遇を享受し、大衆のために汗を流すよりも自らに不利なことは避け保身を優先する場面がしばしば見られる。その結果、不具合に対して眼をつむり、密かに問題を処理したり、新しい提案を押さえ込んだりして若い世代と対立することになる。副部長に昇進した韓常信について以下のように描かれている。「最近他親自出馬去檢查工作少了,主要是在辦公室聽彙報,改文件和找人談話」⁽⁵⁾ (自ら現場に出向いて調べることが少なくなり、主に事務室で報告を聴き、文章に手を加えたり、人を訪ねて話をするのが仕事となった。)

趙慧文は中央の管理組織に在職する夫について指摘している。「在中央一個部裡做科長,他慢慢地染上了一種油條勁兒,爭地位,爭待遇,和別人不團結」⁽⁶⁾ (中央の或る部で科長になると、次第にずるい人間に染上げられ、地位や待遇を争い、他人と協調しなくなったの。)

この間にあって劉世吾或いは書記兼組織部長周潤祥らの第一世代は、上記二つの世代間の対立で組織の乱れを懸念し、事なかれ主義で事態の収束を優先させている。劉世吾らは王清泉が職務を怠り将棋に熱中していることや韓常信の報告が事実を適当に捻じ曲げていること知っても強く指示して修正させる行動を起こさないのである。劉世吾がしみじみと述懐している。「聽說,炊事員們的職業病是缺少良好食慾,飯菜是他們做的,他們整天和飯菜打道,我們,黨工作者,我們創作了新生活,結果,生活反倒不能激動我們」⁽⁷⁾ (聞くところによると、コックの職業病は食欲不足だそうだ、料理することが仕事で、終日料理と取り組んでいるせいだ。我々は新しい生活を創造してきた。その結果、却って生活のことに我々の心が動かされなくなり・・・)

第一世代の人々は、長年にわたり社会変革の第一線で活躍してきた結果、到達した現状に満足して新たな課題に取り組む熱意が生まれてこないと述べているようにも考えられ、特に第三世代の林震が国家や人民に貢献しようと熱意を燃やしているのと対照的である。

5 所謂「官僚主義」についての考察

先に述べたように、この作品の発表当時、中に表れた官僚主義が問題になったと言われている。一般的に官僚主義とは専制・秘密・煩瑣・形式・画一など大規模な組織に伴う現象とも言われている。そこで本作品中の所謂「官僚主義」について検討してみたい。

大規模組織を効率的に運営するためには、各事象について担当者や行動基準などが明示され、個人的な裁量の余地を可能な限り排除することが必要である。しかし現実には、全てに明示的な基準の設定は難しく、重要なことでも基準がないため実現しないことが起こり得るのである。

王清泉の執務不良に対する解任処分決定の会合で、「この問題が5年も放置されていた。」として林震が再発防止策検討を提案して議論になった。韓常信は、「何故もっと早く処理できなかったのかと後で言う人もある。組織部として再発防止の保証はできない。林震同志だって同じ筈だ。」と述べ、劉吾世は「林震の主張する再発防止策の必要性は理解できる。但し担当する仕事は多いし、幹部の数は極めて少ない。今回処分はタイムリーで且つ有効なものだ。工員たちは本処分を歓迎しており、党や区委員会に感謝して涙を流す連中もいた。」と反論した。林震が「規律には欠点があるものだ。欠点を克服し前進することのも規律の求めていることだ。」と主張したが、提案は採択されなかった。この議論が提起しているのは、特定の人間の排除のみではなくて組織の欠陥の克服であり、その積み重ねが組織を前進させるのだという考えである。しかし責任追及は幹部に遡及する可能性があるだけに、組織部幹部としては「忙しい、人がいない、他にも重要な仕事がある」などと言い訳をして保身を図る行動を選択し、管理責任の追求を行わないことを決定した。幹部級の人々にとっては、この問題は触れて欲しくないものであったのだ。それは第一世代及び第二世代のグループと第三世代の対立と理解されるのである。第三世代は未だ保身などとは無関係の立場にあり、正義感・使命感の旺盛な年代でもあるのである。

ここで思い出されるのは、林震が小学校教師に着任後も学生時代の習慣を堅持して「その内に我々と同じように普通の人になるだろう。」との周囲の予想を裏切って、在職中はその習慣を堅持した信念の強さである。今回、林震の提案は採択されなかったが、原点に帰って正しい（と思われる）ことを実行しようとする林震の考え方が、組織部の仕事を経験していく過程で今後どのように変わっていくのか極めて興味のあるところである。

この小説が発表されて間もなく中国国内では、毛沢東論文「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」を契機に整風運動、反右派闘争が起こり続いて大動乱の文化大革命に突入することになった。

謝冰⁽⁸⁾によれば毛沢東は当初この小説を支持していたと言われているが、小説を掲載した雑誌「人民文学」編集スタッフの中には、王蒙の小説の掲載し或いは内容を修正させたとして反右派闘争の中で糾弾された人もいる。王蒙も右派に分類され党を除籍されている。彼は‘63年に一家を挙げて新疆地区に転出して農民と生活を共にし、文化大革命終了までの14年間にわたり作家活動を中断している。

6. 結論

作品中の世代間対立や官僚主義などを検討した。登場人物の職務への熱意と行動に世代間に大きな差異があること、官僚主義とは組織の健全性確保と自己保身・私利私欲の対立であり、第一世代第二世代の幹部級と第三世代の若者の間の対立として捉えることができる。

注

(1) 王蒙 《组织部来了个年轻人》 河南人民出版社 1992年6月

(2) (3) 林默涵 <一篇引起爭論的小説> 原載于《林默涵論文集》當代中國出版社 2001年

(4) 同(1)、35頁

(5) 同(1)、28頁

(6) 同(1)、38頁

(7) 同(1)、32頁

(8) 謝冰 <重說”组织部新來的青年人”> 原刊于《南方文壇》2002年第6期

文献

1. 王蒙 <组织部来了个年轻人> 河南人民出版社 1992 年 6 月
2. 林默涵 <一篇引起爭論的小説> 原載于《林默涵論文集》當代中國出版社 2001 年
3. 謝冰 <重說”组织部新來的青年人”> 原刊于《南方文壇》 2002 年第 6 期
- 4 『王蒙年譜』 曹玉如編 中国海洋大学出版社 2003 年 9 月
- 5 『王蒙作品评论集萃』 崔建飛編 中国海洋大学出版社 2003 年 9 月
- 6 『王蒙自传』 花城出版社 2007 年 4 月